

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

書評：水野一晴編『アフリカ自然学』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005865

水野一晴編

『アフリカ自然学』

古今書院，2005年，257頁，¥3,990

池谷和信（国立民族学博物館）

アフリカは豊かな自然をもつ大陸といわれるが、これまで意外に、アフリカの自然全般を対象にした概説書や専門書がみられなかった。『アフリカの気候』（土屋編，1972，古今書院）のほかでは、『アフリカハンドブック』（米山・伊谷編，1983，講談社），『環境変動と地球砂漠化』（門村ほか編，1991，朝倉書店）などの一部でアフリカの

自然が扱われていたにすぎない。本書の編者は、その原因をアフリカの自然を対象にする研究者が少なかったからとみている。その一方で、アフリカの自然と人とのかわりあいに関しては、数多くの生態人類学の研究が蓄積されてきた。

本書は、アフリカの自然・自然環境および自然と人との関係を対象にして自然地理学の研究者を中心としてまとめられた本である。本書の執筆者は、地理学を中心に農学、人類学、霊長類学などを専門とした14名から構成される。編者は、科学研究費による調査地としてナミビアを新たなフィールドとして開拓して、他地域で成果を挙げてきた研究者と若手の研究者を養成しながら4年間にわたる現地調査を進めてきた。その成果が、『アフリカ自然学』として1冊の本に結実している。

まず、本書には、数多くの図や写真が散りばめられていること、口絵には8頁にわたるカラー写真がみられることが特徴的で内容のつまんだ本になっている。これらによって、アフリカ全体からみて多様な土壌や植生の傾向、およびアフリカを代表する植生といわれるサバンナ景観の具体的なイメージを持つことができる。また本書は、第1部『アフリカの自然』と第2部『アフリカの不思議な自然を探る』という2部から構成されている。

第1部は、地形、気候、植生、土壌、環境変動、リモート・センシングという6つの側面からみたアフリカの自然の概観が説明されている。とりわけ、アフリカ大陸では、乾燥地域および半乾燥地域の占める割合が他の大陸に比べて大きく、乾湿の季節変化が特徴をなす地域を含めると大陸の大半を占める(9頁)、アフリカ大陸と中・南米の熱帯林はマメ科が主体となる点で共通している(29頁)、サハラ砂漠の植物は、それ以南のアフリカ大陸とあまり共通性をもたず、むしろユーラシア大陸中央部とのつながりが深い(30頁)、カラハリ砂漠は、植生的には低木や草本が卓越するサバンナで真の砂漠ではない(30頁)などでみられるように、アフリカ大陸を超えたグローバルな視点からアフリカの自然をみている点が貴重である。

しかし、つぶさに各項目の内容を比較検討してみると、自然に対する視点は執筆者によって多少異なっていることに気づかされる。地形では、地形に影響を及ぼす生物として人間の役割を重視している。気候では、人の作用をあまり考慮していない。植生では、アフリカの植生分布と各々の植生特性が述べられる。土壌では、地形や人口密度分布や砂漠化などと土壌との関係に焦点をおきながら人口増加が砂漠化を引き起こしたという従来の学説を批判している。環境変動に関しては、地球変動のなかのアフリカを眺める視点を強調している。

第2部は、「自然と環境変化」、「自然と地域性」、「自然の個性とそのとらえ方」、「自然と人の営み」の4節から構成される。具体的には、項⑦温暖化による氷河の融解と植物分布、⑧気候変動と植生変化からみた類人猿とヒトの進化、⑨カラハリ砂漠の砂丘の歴史、⑩クイセブ川流域の環境変遷と森林、⑪クイセブ川流域の森林が枯れていく理由、⑫サバンナ植生景観の違いをもたらす要因、⑬雨や霧の発生の仕方の地域性、⑭リモート・センシングで季節河川を見る、⑮住居と農耕景観にかかわる地質の影響、⑯夢のなかの動物たち、⑰自然を覚えて旅をする、⑱精霊の森に暮らすチンパンジー、⑲アルビダ植生の維持機構、⑳ヤシ植生の形成と樹木利用の変容、㉑自然植生ナラの大量枯死、㉒2つのトウジンビエの併存する理由という16のトピックが取り上げられている。

ここでは、各々のトピックの内容を詳述しないが、研究の着眼点、問題の解明の仕方(プロセス)、社会へのアピールという3つのフレームから統一的に紹介されている。しかも、研究の着眼点では、各執筆者がアフリカのフィールドでの景観観察から疑問点を提示しており、素朴な疑問も含まれていて、読者に親しみやすい内容になっている。問題の解明では、手堅いフィールドワークによる読み応えのある部分が多いが、一部、海外の研究紹介が中心の所もある。社会へのアピールでは、人間活動に関する内容を言及する際に論理が飛躍する箇所も見受けられた。例えば、⑦氷河の融解と麓の人びとの精神面の変化に言及しているが(85頁)、ヒマラヤ地域のように氷河の融解による洪水の被害がみられるのか、水をめぐり資源管理への影響はどうであろうか。⑨過去において起こった乾燥化の現象は、現在の砂漠化現象を理解する上でどういう意味で重要であるのか(105頁)、⑩環境変遷は、人びとの歴史を考える際にどのように重要であるのか(114頁)などが挙げられる。とりわけ、⑩にみられる植生遷移の図(113頁)は、考古学や人類学の方法から過去の人間活動を復元した環境変遷史と照らし合わせることで、自然と人との関わりあいの歴史を解明できるものとみられる。

最後に、本書全体に対するコメントは、以下の3点に集約することができる。

第1は、第2部のトピック別の項目つながりが理解しにくく、各々のトピックが並列的にみえてしまう点にある。例えば、本書に序論を加えることで、本書がめざす自然学の具体的な内容を、その目的、方法などから明確に示した方が読者には親切であったように思われる。その際に、本書の多くの節では、自然のとらえ方に人を含めている、あるいは含めようとしているところから人を含めた自然学を本書はめざしているようにみえる。しか

し、本書は自然と人とのかかわりあいを自然の側から見ている地理学的視角が柱であり、人の側から自然を見る人類学の論考は一部にすぎない。つまり、自然と人のかかわりを把握する際に地理学と人類学はコインの裏表の関係にあるといわれるが、どのように両者の統合を考えているのか尋ねてみたい点である。

第2は、各研究者の自然に対するとらえ方が異なっているために、研究視角の整理をした方がよかったようにも思われる。本書では、アフリカ大陸スケール、カラハリ砂漠スケール、クイセブ川スケールなどの様々なスケールで自然を論じている点の特徴である。同時に、第1部の環境変動からみたアフリカで強調されていたように、地球環境の中でアフリカをみる視点を高く評価したい。これは、文化系のアフリカ地域研究では欠けている点であり、グローバル化のすすむ時代の中で、なぜアフリカを研究するのが問われている現在、本書のこの視点の重要性を学ぶことができる。本書の基盤になった調査隊に他の地域の専門家をメンバーにあえて入れた点など、今後のアフリカでの共同研究を遂行する際の組織論としても参考になるであろう。

また、評者の勝手な整理では、本書での自然に対する視角は、自然環境変遷史の復元、自然環境変化と人との関係、自然景観に刻まれた人間活動の把握という3つの点に分けられるように見える。とりわけ、評者は、最後の点に位置づけられる⑱ギニアの精霊の森、⑲アルビダ植生、⑳ヤシ植生などの事例は、マサイの放牧が関与するサバンナ植生やピグミーの関与する森林植生など、人類学における環境史的研究にも通じるところがあり、さらなる研究の展開が可能な対象であるとみている。

第3は、冒頭に述べたように日本では待望されていたアフリカの自然全般を対象にした本であるだけに、基本用語の解説がまとめてあってもよかったように思われる。例えば、大規模な崖地形（グレートエスカープメント）（7頁）、デュリクラスト（10頁）、閉塞した凹地（パン）（11頁）、維管束植物（31頁）、パーティソル（38頁）、地経営力（81頁）、アウトウオッシュ性斜面（82頁）、先駆的植物（82頁）、ラミナ構造（118頁）、メガカラハリ（138頁）などが挙げられる。

しかしながら、本書を一読して読者は気づかされるように、本書のテーマとなる自然に対する洞察は、多くのアフリカ地域の研究者の認識の基礎に位置するものであり、自らが調査対象としている場所の原点を考えさせてくれるものである。また、アフリカにおける人間環境研究とみると、これまでの生態人類学の研究とは異なる新たな見方を提供してくれる。

今後は、ますます生態人類学や人文地理学や環境史な

どの関連分野との協調関係をもちつつも、複数の学問分野を統合する「地域研究的な視角」によって、本書の研究はさらなる展開をするのではないだろうか。本書は、ナミビアなどの乾燥地域の事例を中心としながらも、アフリカの自然の魅力を伝える概説にとどまらず、アフリカの自然と人とのかかわりあいに関する新しい見方を切り開いた本として評価したい。